

**Living with the dead and “the landscape”
—Yuji Sakamoto’s *Itsuka Kono Koi wo Omoidashite
Kitto Naite Shimau* (Love That Makes You Cry)**

MATSUMOTO Katsuya

Abstract

This paper analyzes the screenplay of the TV drama *Itsuka Kono Koi wo Omoidashite Kitto Naite Shimau* (*Love That Makes You Cry*) by Yuji Sakamoto from multiple viewpoints. This work is “Monday 9” (a television drama aired at 9 o’clock on Monday) and is about young romance, but it also has a serious theme. Although this work is presented as being realistic, and appears on the surface to be so, there are also many fantasy elements.

This paper follows the story, focusing on the hero’s voice and the actions of the master. It also considers the dead and the “scenes” held by him // they, and “the drama’s lie” which exposes a fictional gimmick etc.

死者とともに生きることと「景」

——坂元裕二『いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう』

松本和也

1

テレビドラマにおいて、今日、いったい何がりアルのだろうか。あるいは、ファンタジーとは何か。

SF的な要素は別として、もちろん実写に限った場合でも、つくりもの、めいたものからリアルなものまで、さまざまなタイプのテレビドラマの表現が、まずはある。ストーリー展開における過度な偶然性の活用はご都合主義にみえるし、登場人物の性格や言動が何かしらの意味で極端であればファンタジーにみえてしまう。逆に、その多くが、一応はこの現実世界にも起こり得ることとして描かれてはいくのだけれど、それでも時に現実が劇的である以上に、一方ではつくりものであるドラマが現実以上にリアルに感じられることもある。さしあたりそれは、個別の感覚・体験にとどまるものかもしれないけれど、積極的に現実社会を参照してはとりこみ、現実世界でも起こり得る人物や出来事のみを描きながらも、ごく現実離れした登場人物が体現していく軌跡がファンタジ

に映じることとなり、にもかかわらず／それゆえ、現実の重みがそれを見せしていく時、そのようなテレビドラマとは結局のところ、何を描いたことになるのか。

リアルさー現実の重みをもちつつも、ほとんどファンタジーのようなテレビドラマ——『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまふ』（2016・1・18〜3・21〔月曜21時〕、全10回）は、坂元裕二脚本による、六人の男女がおりなす群像劇である。「月9」ドラマらしく、東京を舞台に若者の恋愛模様が描かれてはいくのだけれど、一般的なそれらとは明確に一線を画してもいる。主な舞台となるのは大田区の雪が谷大塚周辺、主人公カップルはいずれも両親を亡くした地方出身者で、現在はそれぞれ運送会社と老人介護施設で働いており、労働量に比して収入はきわめて低い。しかも、当初は、恋愛に何かしらの幸福や希望が見出されることもない。してみれば、夢（恋愛）が叶う場所としての東京、というトレンディドラマの設定を反転させたような重苦しさだが、ドラマ全体の基底的なトーンとなっている。

ここで、主要登場人物（俳優）とその関係を素描しておこう。杉原音（有村架純）と曾田練（高良健吾）とが、物語の中心に位置するカップルである。音の母はシングル・マザーであり、音の幼少期に病死してしまう。音は北海道に里子にもらわれていったが、義父に結婚を強要されそうになったのを契機に、21歳の時に家を飛びだし、偶然出会った練に助けられ、彼のトラックで東京へと逃げる。アルバイトを転々とした後、音はヘルパーの資格をとり、介護施設「春寿の森」で働きはじめる。練も早くに両親を亡くして祖父に育てられたが、祖父がだましとられた畑を買い戻すために、上京して運送会社で働いている。練は広告代理店に勤務している日向木穂子（高畑充希）とつきあっているものの、木穂子には不倫中の相手がいる。練の友人・中條晴太（坂口健太郎）は、練

のことを好きな幼なじみ市村小夏（森川葵）に一目惚れする。また、音の働く施設をもつグループ企業の御曹司・井吹朝陽（西島隆弘）は、「春寿の森」で働きだしてから音のことを好きになっていく。三人の女性は揃って練のことが好きで、練と朝陽は音のことが好きだという、いかにも「月9」的な設定ではあるけれど、音と練の二人の間にはつねに第三者（前半では木穂子、後半では朝陽）が関わることで、三角関係を余儀なくされてしまう。もとより、ここに小夏、晴太その他の人物も関わっていくことで、「月9」らしく錯綜した恋愛関係の網目が描かれてもいく。こうした主要登場人物を、脚本家の坂元裕二は自家薬籠中の会話劇を軸として、ささいな日常を、人々の住まう街を、まとう衣服を、交わしあう言葉（方言）を、ていねいに、現実らしく書いていく。

このような『いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう』というテレビドラマの世界には、現実にも容易に見出せそうな人々が多く登場する一方で、いささか非現実的な人物も登場する。謎めいた背景のままにさまざまな仕事にコネクションもつ晴太、練の同僚で虚言癖のある佐引（高橋一生）、ストイックにすぎる農耕生活に満足している練の祖父・健二（田中泯）などである。ただし、彼らはリアルな臨界を示しはしても、現実的にあり得る設定として描かれ、そのよくなものとして、演じている。それに対して、一つ一つの言動はごく現実的で、どこにも非現実的な要素など見当たらないにもかかわらず、存在の総体がファンタジーに見えてしまうのが主人公の二人——音と練である。もとより、過酷な現実をのりこえて結ばれそうになる二人の恋愛がファンタジーだというのはない。音と練とが、それぞれの特異といってよい純粋な性格ゆえにとる言動が、こんな人はいない^①と思わせるほどに非現実的なのだ。しかも、そうした二人の特異な性格ゆえの言動こそが、物語上の偶然とも実に多く結びつき、ドラマを展開させていく。

こうした人物設定や偶然の多用をはじめ、脚本家・坂元裕二が書く二〇〇〇年代以降のテレビドラマにおいては、^シドラマの嘘^シが多用される。『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう』においても、つくりこまれた会話、人間関係の構造的な配置とその転換（いれかえ）、変奏を伴った場面の反復など、書きたい何かのために、積極的に非現実的^{フィクション}なしかけが導入されていく。もとより、それはリアルさを損なうリスクと不可分なものなのだけれど、そこに現実の重みも添えられることによって、テレビドラマとしてのリアルさは維持されていく。

本稿では、以上の関心・問いを抱えながら、リアルなファンタジーである『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう』を対象に、リアルさ・現実の重み、そのてざわりについて、少しく考察をめぐらせてみたい。

2

『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう』というテレビドラマは、北海道に住む音のところに、練が遠路東京から会いに来ることで動きはじめる。練の友人・晴太は、旅先の北海道で金に困り、置き引きする。そのことを聞いた練は、晴太をたしなめているうちに、残された荷物から手紙を見つけ、それを返すために、少ない手がかりを元に北海道へと向かう。見知らぬ相手、自分が盗ったわけでもない荷物、北海道の地理的な遠さ、そして犯罪者と見まがわれるに違いない状況——いずれをとっても、ふつうは練のような行動をとらない。ここに、すでに練の特異なまでに優しい性格、二人の出会いそれ自身がファンタジーにも映じる要因が宿っている。そのことはもちろん音にとっても同様で、当初は練の行動に驚きを隠せなかった。一方、練にはそうしたリスク

を意に介さないほどに、大きな動機があつた。

練「これ返しに来たんです」

音「顔をしかめて」読んだ？」

練「ごめんなさい。読んだら絶対返さなきゃいけないやつだと思つて。この人これ何百回も読んでただろうな、これこの人のつかえ棒なんじゃないかなつて思つて」

音「(内心そうで)……」

練「返します。お母さんからの手紙」(第1話、17道路、20頁)

晴太が置き引きした荷物から出てきた手紙が、大切なものだと判断したから返しに来た、というのが練のいふんなのだけれど、そこには、練自身の大切なものに対する切実な思い入れ・共感もあつたようなのだ。

音「(関西弁で) 何で東京から手紙持つて来てくれたん？」

練、少し躊躇しながらも。

練「(会津弁で) おんなじだ。俺も親はいね。俺にもつかえ棒がある」

音「……(頷き、公団の方を向く)」(第1話、42公団・前の通り、44頁)

こうして、現在の生活は全く異にしながらも、両親を亡くしてもなお「つつかえ棒」（大切なもの）を支えに生きてきたという音と練の共通点が、力強く浮かびあがる。おそらく、このことがあったから、第1話で眠れぬ夜に外に出た音は、トラックの故障で帰りあぐねていた練に話しかけて一夜を明かすのだろうし、結婚を強要しようとする育ての親から雨中を逃げ出してきた音は、東京への帰路、道路工事で迂回を余儀なくされた練のトラックへと乗りこむのだろう。こうして音と練は東京へと向かうのだけれど、ここまでの展開にも、実に多くの偶然が関わっている。こうした展開がご都合主義に見えないとすれば、すでに描かれた音をめぐる生活環境の過酷さ（肉体労働、里親との関係）が大きく関わっているだろう。登場人物をとりまく、肉体的にも経済的にも厳しい現実を描くことで、テレビドラマの虚構世界に現実性を備給しながら、その影で登場人物たちの言動・関係には非現実的な偶然を重ねていくという手法こそが、『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう』において以後も頻用されていく、リアルなファンタジーの書き方なのである。

しかも、こうした偶然を重ねた末の場面は、「走るトラックの車内、無言で運転している練、手紙を読んでいる音。」（ト書き）というもので、それだけではとりたてて意味を発生させることのない寡黙なものながら、それでいて後々の重要な伏線ともなっていく。

読み終えた音、手紙を閉じる。

音、涙が溢れてくる。

練は気付きながら、何も言わずに運転を続けている。

窓の外は雨が雪に変わっている。

雪が降り、一面の雪景色だ。(第1話、53道路、52頁)

走るトラック、青森のインターを通る。

運転している練、何かに気付き、音に示す。

音、見ると、ちょうど朝日が昇るところだ。

見つめる音と練。(第1話、54東北自動車道(日替わり)、52～53頁)

ト書きながらもていねいに映像化されるこの場面には、『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう』のエッセンスが揃っているばかりでなく、音と練にとつての大切なもの、二人の関係のゆくえまでが凝縮されている。二人にとつては、右に引用したような特別な「景」、大切な死者とそのメッセージ、さらにそれらを共有できる相手が何より重要なのだ。そして、二人とも過酷な現実を意に介すことなく、それを乗りこえるため、路地に咲くささやかな草花を愛で、言語化しにくい風景を思い出し、そうした「景」を共有し、そして生きていく。

こんな二人だから、上京直後、連絡先を交換する以前にはぐれてしまうのだけれど、再会する偶然が準備されるのは必然といつてよい。介護施設での長時間勤務から深夜バスでの帰路、音は捨てられた犬を見捨てておけずに抱きかかえるものの、あまりの眠さに深夜の交差点で倒れこんでしまう。昼間の労働で疲れ果てた練も、深夜の帰路で犬のことが気になって探し歩き、犬を抱えたまま道に倒れこんでいた音を偶然見つける。「練、はつと

して道路を渡って駆け寄り、気付く。／倒れているのは、音だ。／練、一瞬ぼかんとして驚きながら、音を抱き起こす。」というト書きにつづき、次の場面が描かれる。

目を開ける音、見上げる。

目が合う二人。

音「薄く微笑み、関西弁で）会えた」

練「……」

音「会えた」

練「……（頷く）」（第2話、82道路／交差点、95頁）

ここでも、いくら疲れていても、しかし犬のことを優先するという、練と音に共通した特異なまでに優しい性格がみてとれるのだけれど、やはり現実の過酷さが、再会というテレビドラマ的な偶然に現実性を担保していく。しかも、二人をひきあわせたこの犬にもまた、庇護者はいない。

音「この子の飼い主って」

練「いない」

音「そっか。私たちと一緒だね」

練「うん」(第2話、83坂道、96頁)

その後、練は近所で親しくなった一人暮らしの老人・静恵の家で音を休ませ、翌朝には彼女が求めた名前と電話番号を記したメモを残していく。この夜をきっかけに、近くに住みながらもこれまですれ違ってきた練と音は、バスや道や静恵の家でたびたび顔をあわせるようになる。ただし、上京直後にはぐれて以来二年、練を思いつづけてきた音に対して、練にはすでに木穂子がいる。当初、練と木穂子は「お互いのさびしさをうめるため」につきあっていたにせよ、木穂子が不倫相手と別れ、練の前で装うのをやめる決断をしたこともあって(それゆえに、木穂子は愛人からホームに突き落とされて入院する)、練は真剣に木穂子にむきあおうとする。練が音と再会し、音に惹かれていったのと前後する時期の出来事である。

練が木穂子との関係・彼女の美点について音に話した際に、それを聞いた音は「説明するんは、好きって言うんとはちゃうよ」といっては練を責め、不意打ちのようにキスをしては「好きやからに決まってるやん」、「引越し屋さんのこと好きやからに決まってるやん」と思いをぶつけてはいた。そのこともあってだろう、ある夜、誠実な練は音を静恵の家に誘う。そこで、祖父のことを話しはじめる練は、音に話があるのだという。

練「……東京は向いてないって思うんです。ウチに帰っても帰った気がしません。自分の部屋なのに、来て
る、気がします。俺が帰るのは猪苗代湖の家で、ここは、って」

音「うん」

練「まだ帰れない理由があつて、今はまだここにいます」

音「うん」

練「（胸に手を当て）ここに、でかい、でかい穴が開いている気がします」

音「うん」

練「開いたまんま、そうやって、東京で、五年経って」

音「うん」

練「そうやって……杉原さん」

音「うん」

練「あなたを好きになりました」

音「……」

練「好きで、好きで、どうしようもないぐらい、になりました」

音「……」

練「いつもあなたのことを思っています」

練の思いと、そしてもうひとつの切実さが届き。

音「……（涙が浮かぶ）」

練「それを、そのことを、諦めなきゃいけないのは」

音「……」

練「苦しい」

音「（涙を溜めて）……」

練「杉原さん。今日まで冷たくしたことを、ごめんなさい」

音「（首を振る）」

練「明日からまた同じことします」

音「……はい」

練「ごめんなさい」

音「はい」

練「ごめんなさい。好きでした……」

言い終わる前に、音、手を伸ばし、練の手を掴んだ。

強く激しく掴む。

練、その手を握り返したい。（第4話、52静恵の一軒家・居間・台所、184～185頁）

「いつも」音のことを思っているほどに好きなのだと告白しながら、練は同時にそのことを諦めるという。それは、時間的に先行して自分を必要としている木穂子のためであり、それゆえに練は明日からも音に冷たくしていくのだし、音への気持ちは「好きでした」と過去形へと改められてしまう。このようにして、お互いの気持ちを確かめあいながらも、二人は現実離れするほどの優しさによって木穂子を思いやり、つきあえない現実を受け

いれる。けれども、このことによって、二人の理解・愛はさらに深まっていくようですらある。

後日、健二が怪我をしたと聞きながらも、帰省を決めかねている練は、「何も出来てないうちは帰れないんで」と音にいう。それに対して「何もってことはないんじゃないですか」と反論する音は、「少なくとも私は引越して屋さんに助けて貰いました」、「助けて貰わなかったら、今頃まだ北海道にいて、いろんなこと諦めて生きてたと思います」と、現在の暮らし・人生の起点に練を位置づけ、そのことの感謝を語るうちに、二人はまたしてもだいたい何かい心を共有していく。

音「そういうことを、わたしはいちおう、もう表に出すことはしないでですけど、（棚をジェスチャーで）奥の方に、棚の一番奥の方に、大事にしまつてあるので」

練「それは、僕も……（棚をジェスチャーで）しまつてあります、一番奥に、大事に」

音「はい」

練「（自分と音の間を示し）それぞれ別々に、一個ずつ持つてるんだなと思ってます」

音「はい、一個ずつ」

練「はい」

音「だから何も出来てないってことないと思います」

練「はい（と、礼をする）」（第5話、23 静恵の一軒家・居間、207頁）

もちろん、それは「恋ってあわない時間に育つものじゃないんですか」といつていた音にとつてさえ、残酷な痛手―失恋には違いなく、しかし持ち前の非現実的なほどに前向きな性格によって、ありえないほどのけなげさで、次のようにしてこの出来事を積極的に意味づけていく。

音「わたし、「練のことを」ちゃんと好きになりました。短かったけど、好きになった。好きだったらそれで良かった。それがすごく嬉しいんです」

静恵「そう」

音「ずっと、ずっとね、思ってたんです。わたし、いつかこの恋を思い出して、きつと泣いてしまう。って。わたし、わたしたち今、かけがえのない時間の中にいる。二度と戻らない時間の中にいるって。それぐらい、眩しかった。こんなこともうないから、後から思い出して、眩しくて、泣いてしまうんだろうなって」(第5話、46静恵の一軒家・居間(夜)、231頁)

もちろん、これは音のセリフ―感情なのだけれど、同時に練のそれでもあるはずだ。「わたしたち」という一語が、明瞭にそのことを物語っている。ことは、木穂子云々という話ではもはやない。景を共有する音と練は、すでにお互いを深く理解しあい、求めあい、そこに現実的な障害(二人がつきあうことで傷つく人の存在)があれば、自らの「恋」を現実化しないまでのことで、好きだという気持ちやゆらぐことはみじんもない。「いつか」「後から」と未来のことを想像し、そこから折り返す視点によって現在の「恋」を泣くほどに眩しいのだ

と価値づけていく音だけれど、「恋」しあう音と練は、この時／すでに、眩しい。眩しい光に包まれている。

この眩しさは、現実的な桎梏に囲まれている二人にとってさえ、一方でファンタジーのような二人の「恋」のそれである。ただし、それは、決して非現実的なものではない。音や練のような特異な優しさをもたない視聴者（一般）にとつて非現実的に見えているということにすぎない。ここに至るまで、二人を結びつけてきた少なからぬ偶然は、そもそも現実（天候や育ての親、東京という街、それぞれの職場……）にはありえないほどの、エゴイズムとは無縁な、他人を思いやる二人の優しい性格によるものだったはずだ。だから、そのような二人にとつて、現実的には恋人同士にならないことは、もちろん辛く悲しいことだけれど、そのかわり／それ以上に、かけがえない大切なものを共有し、理解しあい、認めあっているのだから、恋人以上の存在・関係ですらある。その二人の紐帯は、目に見えない死者や記憶の中の「景」など、当人たちにとっては切実できわめて現実的なものでありながら、ふつうには理解されがたい非現実的なものによって成立している。これこそが、リアルなファンタジーである『いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう』というテレビドラマの相貌なのである。

3

いささか非現実的な偶然を折り重ねること、『いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう』第5話には、主要登場人物六人が静恵の家で鍋を囲むという、ドラマの嘘の最たる場面が用意される。

そこで晴太が木穂子の不倫を暴露したのにつづき、小夏は練と音が両思いだと指摘し、逆にいえばそれ以外の

関係（木穂子と練、小夏が練を好きなこと、朝陽が音を好きなこと）はすべて二番以下であることが残酷に露呈される。大泣きする木穂子と小夏をはじめ、誰もが氣まずい雰囲気をつつりと味わいつくした後に、それぞれの感情を抱えた六人は、それぞれの道を歩きます。音は、怪我をした健二のためのノートを家に届け、練は故郷へと発った。その後、『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう』の現在時が二〇一一年三月一日直前であることを示すことごとを点描した後、物語は東日本大震災を挟んで五年に及ぶ空白をまたいでいく。

その結果、ドラマの現在と放映時がごく近接してゆき、そうした面からも震災以後の日本という現実性が備給されつつ、第二部がはじまる。それぞれの登場人物に、五年という時間が流れたのだ——スーツを着た練と晴太は、東京で貧困にあえぐ若者を食い物にする会社で働かだしている。

五年の空白を浮き彫りにしていくのは、偶然にも静恵が木穂子を見かけて自宅に招き、そのことによって再会を遂げた木穂子と音との、練を話題とした次のような会話によってである。

木穂子「じゃあ、最近、練とは……」

音「全然です。あれきり。最後に会ったの、あの時ここで」

木穂子「え……あの時？」

音「はい」

木穂子「わたしもだよ、わたしもここで会ったきり」

音「（内心驚き）……連絡、とかは」

木穂子「震災の時」

音「あ（と、頷く）」

木穂子「連絡なかった？」

音「ありました。その日は、こっちからかけても通じなくて」

木穂子「うん。会津^{あいづ}だったし」

音「うん」

木穂子「びっくりして」

当時を思い起こしながら話している二人。

木穂子「次の日か、その次か、通じて、メールだけど、何回か、無事です、無事ですって」

音「わたしも、次の日です、メールで何回か遣り取りして」（第6話、10 静恵の一軒家・居間、15～16頁）

こうして音と木穂子は、相手が練とはつきあっていないこと、別の恋人がいること、そして震災の時にメールで安否確認をしたことまでを、お互いに知ることになる。気になったのだろう、音は練が以前働いていた運送会社を訪ね、練の居場所を教えてもらう。そこで、音が目の当たりにしたのは、あまりにも大きな変貌を遂げた練の姿だった。若者の搾取に加担する仕事に携わっていることはもとより、表情からは優しさが消え、話し方も変わってしまった。取りつく島のない練の態度に、音は「ふいに思いが込み上げ」（卜書き）る。

音「どうして、何の用ですかなんて聞くの？」

練「え、と」

音「（思いと裏腹に微笑いながら）何の用ですかなんて。用なんかあるわけじゃないじゃないですか。用があつて来てるわけじゃないじゃないですか。用があるぐらいじゃ来ないよ。用がないから来たんだよ。顔が、見たかっただけです」

練「……」

音、床を這つてテーブルから出て、練の元に行き。

音「わたしは、わたしはこっちにいたから、東京にいたから、メール貰つても、人づてに聞いても、実際会うまでわかんないじゃないですか。大丈夫かどうかわかんないじゃないですか」

練「……」

音「顔が見たかったです。声、聞きたかったです。無事で良かったです。いて良かったです。それだけです」（第6話、37雑居ビル・練のオフィス兼自宅（夜）、42頁）

練の反応は相変わらず冷たいものだけれど、一度はお互いを強く求めあい、深く理解しあった二人である。練がどれほどに変わってしまった／変わってしまったからこそ、音は練のことを心配する——それが木穂子のいう通り、「心を配る」こと、「昔好きだった男に心を配る」ことに他ならないとしても。ただしそれは、第一部の終幕、東日本大震災直前に帰省した折に、健二に語った練自身の言葉——希望でもあったはずで、そうした点にお

いても、やはり音と練とは似ている。

練「東京の人にも、俺のごと知って貰えだ。その人だちはたぶん、会津って聞いたら、俺のこどを思い出してくれっと思うんだ。会津。あー練の町か。そう思っ貰える。俺はそれが嬉しんだ。東京のあの人。会津のあの人。行ったごねえとごに知ってる人がいる。住んでる人のこどを考える。今、東京でなんかあったら、俺は友達の心配をする。みんな、そうやって人に会って、人のこどを思っ生きてる。そういうのが嬉しんだ」(第5話、47健二の家・居間、232頁)

ならば、「人のこどを思っ生きてる」ことを嬉しいと感じ、ささやかながら手ごたえのある生を、その現実離れた優しさで営んでいた練は、なぜこうも変わってしまったのか。練の職場の先輩・佐引から、音は次のような話を聞く。――「震災の年の、秋頃」、実家に帰省していた佐引が会津まで練に会いに行っった時、健二は入院しており、しかもその時すでに「人が変わってた」のだという。

佐引「もうじいさんには練が誰なのかもわかってない。そんな状態で、毎日毎日口汚く練を責めるんだよ。

(会津弁で) この盗っ人が。この卑怯者が。俺の畑^{はだけ}を返せ。山を返せ。おめえのせいだ。死んずまえ……病気だから仕方ねえのに、練は馬鹿だからさ、受け止めちゃうんだよ。(会津弁で) じいちゃん、申し訳ねえ、じいちゃん、申し訳ねえって言って。罵倒されて蹴られて、謝った。じいさんは一度

も練のことを思い出すことはなかった。病院をひとりで抜け出して、徘徊して、駅で倒れてるのを発見された。八十年間大根育ててた人の最期が、怒りと憎しみと孤独だけだった。それが大好きなじいちゃんの最期だったんだよ」(第7話、7喫茶店・店内、55頁)

佐引によれば、「夢も、思い出も、帰る場所も」、「あいつを支えてたものの全部が消えてなくなった」ということになる。練のかつての言葉でいうならば、考えうる限り最も残酷なかたちで「つつかえ棒」を失ったことになる。振り返ってみれば、母を亡くして里子にもらわれ、結婚を強要され、それが不調に終わったことで養父に亡母の遺骨をトイレに流された夜、音は練に助けられて東京へと逃げてきたのだった。両親を亡くし、それでも「つつかえ棒」を支えに、それぞれの人生を生きてきた音と練。だから、ドラマ全体を俯瞰すれば明らかなように、ここでは音と練の立場が、第1話と入れ替わっている。第一部では苦境にあった音を練が救ったのだけれど、第二部では練が苦境に陥っており、音が救いの手を差し伸べていく(そのことを知った木穂子に、「音ちゃんが練を見つけたって聞いて、あ、って思ったんだよ。わたしは会いに行かなかった。今の人、捨てられないから……でも彼女は会いに行った。」という台詞がある)。こうした関係性を反転・変奏させた上での反復もまた、*ドラマの嘘*として、『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう』にはま、見られる。

佐引の話を聞いた音は、恋人の朝陽にわざわざ断って、「心配だから」と練に会いに行く。

音「サスケ。おぼえています？ 大きくなりましたよ。この五年で、こんなに。写真見ますか？ (と、携帯

で写真を表示させ、見せて）サスケ。可愛くないですか？」

練は見ようとする。

音「曾田さんのこともおぼえてると思います。だって子犬の時に曾田さんに拾って貰ったじゃないですか。

おぼえてます？ 交差点でわたし、サスケ連れてて、曾田さんが探しに来て、会えたの」

（第7話、14雑居ビル・練のオフィス兼自宅／廊下、60頁）

サスケの可愛さや再会の記憶ばかりではない、子犬を見捨てておけなかった、現実離れた練の優しさに、音は訴えようとしていたのかもしれない。相変わらず他人行儀ではあるけれど、何かしら心をゆさぶられたのだから、練は死んだ時に着ていたという汚れたパジャマを見せては、健二がいかに惨めに死んだかを音に訴える。一度は引きさがる音だけれど、その時、音は健二のパジャマを持ち帰り、それを洗濯することからはじめていく。何を始めたのかといえば、健二の死による練の傷痕を、今の自分にできる仕方で回復させようとしていくことである。具体的には、パジャマから出てきたレシートによって、健二の晩年を想像・創造していくことだ。パジャマを返しに来た音は、練の前でレシートを読みあげては、ありし日の祖父の生活を想像していく。

音「……わかんないんですけど、本当のところはわかんないんですけど、おじいちゃん、怒ったり、憎んだり、そういうのばかりじゃなかったんじゃないかって」

練「（そう思える）……」

音「毎日、ちゃんと生活してたんじゃないかって。昨日は普通の蒸しパンだったから、今日は栗の蒸しパンにしよう。さっきのあんパン、美味しかったからもう一回食べよう。そんな日もあったのかなあって
思います」

練「……」

〔略〕

音「畑のことも忘れてなかったんだと思います」

練「……（頷く）」（第7話、34雑居ビル・練のオフィス兼自宅（日替わり、朝）、83～84頁）

惨めだと思いこんでいた健二の晩年に、ささやかだけれど喜びのある生活を思い描くこと。レシートを手がかりに、音はそうにして練の心を解きほぐしていく。そして音はついに練に、健二が最晩年まで畑に出て、元気に過ごしていた姿を想像させることに成功する。

音「お酒、二本買われてどこかで飲んだんでしょうか」

練「（レシートを見つめ、理解して感極まり）じいちゃん自分じゃ一本しか飲まね」

音「（え、と）」

練「じいちゃんが酒を二本買う時は決まってる。種を植えた時だ。一本は自分で飲んで、もう一本は、（涙を流し、声が詰まりながら）畑に飲ませる」（第7話、34雑居ビル・練のオフィス兼自宅、85頁）

こうして音は、練の喪失を回復させることに成功していく。朝陽とつきあいつつも、音は粘り強く練の元に通い、練の大切なもの―健二の記憶を、誇りとともに甦らせるために心を配り、ついには練の心を溶かし、ふたたびあの練が戻ってくる。そのことを確認するための儀式として、音の求めに応じて練は静恵の家へと赴くだろう。

犬を抱いた音が見守る中、練と静恵が向かい合って座っている。

静恵 「震災の時はどこにいたの？」

練 「会津の家の近所に」

静恵 「（頷き）無事で良かった」

練 「（頷き、込み上げるものがある）」

静恵 「よく頑張ったわね」

練 「（頑張れてませんと首を振る）」

静恵 「よく頑張った」

練 「（強く首を振る、もう一度強く振る）」

静恵 「（そんな練を見つめ）生きてる自分を責めちゃ駄目よ」

練 「（……それだった）」

静恵 「（音を見て）音ちゃんを見てると、音ちゃんのお母さんがどんな人だったかわかる。（練を見て）練を

見てると、練のおじいちゃんがどんな人だったかわかる。（微笑みながら）わたしたち、死んだ人も、これから生まれてくる人とも、一緒に生きてるのね」

音、練、静恵の言葉を思う。

静恵「精一杯生きなさい」

感極まる練、深々と頭を下げる。

静恵「おかえり」（第7話、42 静恵の家・居間、89～90頁）

静恵にとっては、震災以後、はじめての練との再会である。震災以前の練は、一人暮らしの静恵の元に通い、庭に草花を植え、そして運送会社で引越し業に携わっていた。だから、静恵ら登場人物をはじめ、視聴者にとっても練の苦境は震災を契機としたもののように映じがちである。ただし、練の心を決定的に傷つけたのは、最晩年の健二であり、その言動、死である。だから、『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまふ』における東日本大震災とは、大きな自然災害であると同時に、時間（感覚）に関わる象徴的な断絶を示す出来事でもある。そうであれば、『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまふ』に描かれた東日本大震災とは、テレビドラマと現実世界との切り結びを示す社会的事件であると同時に、現実／テレビドラマ双方において出来事以前／以後を決定的に切り裂く指標でもあり、それは同時に、震災前の時間をかけがえのないものゝ二度と戻らないものとしてフレームアップする装置でもある。テレビドラマ『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまふ』についていえば、第一部（第1話～第5話）と第二部（第6話～第10話）とを五年という空白（ブランク）によって分断・断絶し、

それに伴う登場人物たちの変化を通じて現実性を備給し、現在である第二部からみれば、さまざまな意味で遠く隔たった、振り返るべき時間として第一部を意味づけ直していく。そのこととあわせて、東日本大震災という出来事は登場人物たちが途絶えていた連絡をとりあう契機ともなり、再会した後には震災時にはどうしていたかと、生きていることを喜び語りあう、時空間をこえた共通の話題ともなっていく。

右に引用した場面には、そうした『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう』に書きこまれた東日本大震災に関わる複数の意義が折り重ねられている。もちろん、右の場面には、直接会話をしている静恵と練の他に、音も同席している。庭を背に静恵、テーブルをはさんで練、その奥に控えるように音がいる。だから、静恵は、練と音とを見ながら話をしており、さらに、二人にまつわる死者（音の母、練の祖父）を見てもいる。

とはいえ、今更こうした場面を非現実的だと驚くにはあたらない。第一部で、練はいち早く手紙を介して音の母を見ていたのだし、第二部になれば今度は音が、パジャマとレシートを介して練の祖父を見ていた。右にあげた、静恵、練、音が見ていたのは、いずれも死者である。ここに、練と音、そして二人を見守る静恵に共通する特異点が浮かびあがる——彼／彼女らは、この世界を目に見えるものだけで捉えることなく、死者をも見えている。してみれば、『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう』とは、リアルなファンタジーの他ではない。

そのことは、静恵の家の庭に植えられた草花に象徴されているかもしれない。練が畑仕事を教わったのは健二からで、草花の面倒を見ることは、だから練にはそのこと以上の意義がある。（朝陽が好きな夜空の星ではなく）路地にささやかに咲く花の写真を撮り、お互いに見せあってもいた練と音は、単に好みを同じくするばかりでなく、相手にとって大切な死者を理解しようとするにおいても同伴者なのだ。こうした現実的な細部の積み重

ねによって、『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう』においては、音と練が共に生きてきた死者が、確かな現実の手ざわり・重みをもって、画面には映らないままに登場しているのだ（練の祖父、音の母は回想シーンとして映像化されているが、それは本人の記憶の中のもので、実際は視聴者にしか見えない）。こうした二人にとって、大切な死者との記憶が刻みこまれた「景」は、きわめて重要である。

さて、練があ、の練に戻った以上、そして木穂子との関係が清算されているのだから、音への恋情が募るのに時間はいかからない。ところが、五年の空白のうちに、音は認知症患者への献身的な治療にあたった朝陽を尊敬するようになり、すでに二年つきあっており、プロポーズまでされている。一度はそのことに驚きながらも寿ぐ練だけれど（第一部の反転・変奏）、後には音の朝陽への感情が「恋」とは別のものではないかと疑い、朝陽の存在を知りながらも、音への恋情をとどめることはない。音自身もプロポーズを受けるべきか戸惑っており、朝陽とのすれ違いがつづいたある夜、訪ねてきた練を部屋に入れる。この日、音は練に方言で話しかけていく。『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう』において方言の使用は、相手への警戒を解いて本音で話していることのサインである。

練が佐引からもらったコンビニのケーキを手に入れたことから、その日が練の誕生日であることを知った音は、プレゼントがわりに施設でしていたように、練の絵を描きたいと申し出る。真夜中、丸いテーブルを挟んで音が練をスケッチしていくうちに、練は次のように語りだす。

練「……最近、ずっと」

音「うん？」

練「ずっと、杉原さんのことを考えてました」

音「（練を見ていて）……」

練「何をしてても、杉原さんのこと、考えてました」

音「……」（第8話、46音のアパート・部屋、132頁）

絵を描く／絵に描かれるために見つめあう二人なのだけれど、練のセリフはすでに「恋」の告白以外のものではない。それに対する音の返事・応答は、実に音らしい、そして二人らしい。景に関わるものであった。

音「引っ越し屋さん」

練「はい」

音「（関西弁で）あんな」

練「はい」

音「六歳の時、お母さんが死んでね。火葬場に行ってん」

練「はい」

音「火の中に棺が入って、係の人から二時間少々待っててくださいって言われて」

練「はい」

音「他の人らは待合室行つて、わたしは駐車場行つて、ひとりでな、地面に絵描いててん、チョークで」

練「はい」

音「気が付いたら夕方なつてて。上見たら、もうさっきまでと空の色が変わつてた。ちよつと怖い空やった。高いような低いような、オレンジみたいなピンクみたいな優しい、淋しい、そんなんやつて……めつちや綺麗きれいかつてん。そういう時やつたから、特別に見えたんかもしれへんけど、ほんまに綺麗やつたんよ。お母さんはもうおれへんから、誰かに教えよ思て、行つたら、遊んどらんで座つてなさい言われて。せやけど、わたし、ほんまに綺麗な空やと思たから、誰かに話しかつてん。ずうっと、今までずうつとな、あん時見た空の話がしかつてん。誰かに言うても、伝わらへん氣して、伝わらへんかつたらつて思て、言われへんかつたんやけど……（練を見て）ほんまに綺麗やつたんやで」

練「（音を見つめ、涙が浮かんで）」

音「（練を見つめ、涙が浮かんで）」

× × ×

回想、火葬場の駐車場。

地面にチョークで花の絵を描いていた六歳の音、空を見上げた。

音の視界いっぱいに広がる美しい空。（第8話、46音のアパート・部屋、132（133頁））

音は返事をはぐらかしたのではない。ずうっと誰かに話したいと思ひながらも話せずにはいた、死んだ母を焼い

た日に見た「綺麗な空」Ⅱ 〴〵景 の話を、ようやく練にすることが叶ったのだ。母にしたかったけれど、できなかった話。母を亡くしてから一人で生きてきた音は、今、母に代わる聞き手にめぐりあっている。こうして見つめあう二人は、音の亡母にまつわる大切な 〴〵景 を、また共有していくだろう。

離れて向かい合ったまま、音と練。

練 「(音を見つめていて) ……」

音 「わたしも。わたしもずっと曾田さんのこと考えてた」

練 「……」

音 「何してても、曾田さんのこと考えて、(首を振り) 曾田さんのことしか考えられへんかった。おんなじやね」

練、音を見つめて。

練 「杉原さん」

音 「……」

練 「好きです」

音 「……」(第8話、46音のアパート・部屋、133～134頁)

第一部末の状況を反転・反復させたかのような右の場面で、音と練の相思相愛は、もう疑いようがない。残る

問題は、音がプロポーズされていることも含めて、作品世界中のこの現実の中で、それをどのように成就していくかだけである。ここでポイントとなるのは、態度の決まった練ではなく、ゆれている音（の決断）であることは、第一部の反転であることも含めて、見やすい。その音は、迷ったすえに、練とはつきあうことなく朝陽のプロポーズを受ける決意をする。少なくとも、一度は木穂子にはつきりとそうした意思を示している。木穂子に「音ちゃんには練やろ」といくら食いさがられても、「あの人（練）はわかってくれる」と、愛にも見まがう信頼を示しつつも、気持ちやゆらぐことはない。そのことを伝えるために、音が練と待ちあわせをした夜、またしても「ドラマの嘘」を活かした偶然がもたらされ、二人の別れはひきのばされる。

待ちあわせ場所で練が待ちぼうけを食っている間、音はかつての自分のような明日香（芳根京子）に声をかける。上京したての少女が、置き引きをされて困っていたのだ。大事な約束に先んじて、目の前の困っている人を助けるという、現実離れするほどに優しい音の性格が、ここでも偶然を招きよせる。お腹をすかせた犯人・三希也を早々にみつけた明日香は、事情を解して許そうとするのだけれど、「ひつたくり」と聞いた会社員が三希也を捕まえようと追いかけたことで、歩道橋での逃走劇に巻きこまれた音は頭を打ってしまい、病院に搬送される。ドラマではその間、病院での緊迫した場面と、音を待つ練の様子が交互にさしはさまれていく。遅れている音を心配した練は、階段に腰をかけ、音に語りかけるように、留守番電話にメッセージを吹きこんでいく。

練の声「俺、いつも思ってるのは、そんなにたくさんはなくて、ずっと変わってません。ひとつなんです。

おぼえてますか。杉原さんと東京に行く途中で見た。どこだったかな……夜明け。夜明け見ました

よね。夜が終わるの、一緒に見ました」

練の声「東北自動車道に太陽が昇る。綺麗だった。そっち向かって、俺と杉原さん走ってた。眩しくて、杉原さん、ちょっと笑って、俺、嬉しかった。眩しかった。あの時、思いました。この人が、どうか、幸せでありますように」

練の声「あなたはいつも今日を必死に生きてるけど、明日を信じてる。世の中に希望がないからって、ひとりひとりに希望がないわけじゃない。あなたを見るとそう思う。俺、これから何があっても変わらないです。俺が思ってるのは、いつも、ずっと、ひとつだけです。夜が終わって、朝が来て、眩しくて笑っちゃう」(第9話、47駅周辺、171～172頁)

音が話してくれた、母が死んだ時の「綺麗な空」にならうかのように、練もまた一つの「景」を思い浮かべ、その夜明けの景色、眩しさを、離れた場所にいる音と共有していく。第一部の結末部で、練を好きになった気持ち、時間を、かつて音は「眩しかった」といつていたけれど、そもそも音と練が北海道で出会い、東京へと向かった時点で、二人は眩しい「景」を、すでに「ともに目にしていたのだ。トラックから見た夜明けの「景」は、二人の切つても切れない縁「関係の起源を示してあまりある。

病院で音が意識をなくしている間に、練からずいぶん遅れて朝陽も音の母の手紙を読み、身を引く決意を固め

る。それは、練／朝陽の何かしらの優劣に関わることは全くなく、死者を共有できるか否か、相手の大切なものをそれと理解できるか否か、そうしたタイプの違いによる。そして、『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう』の主要登場人物には、そうしたタイプの人物は音と練しかない。だから、現実的な恋愛模様やそのゆくえとは別に、練と本質的に結ばれるのは音しかない。朝陽も、遅れてそのことに気づく。

朝陽「君が寝てる間に、お母さんの手紙を読んだ」

音「あ、と」

朝陽「僕は、一番の人じゃなくていい、二番目でいいって言っただけど、間違ってた。それは君のお母さんを裏切ることになる。それに、一番や二番なんてない、大切に思う人に順番なんて付けられないんだから」

音「（それはその通りで）……」（第10話、25音のアパート・部屋、191頁）

音が入院しなければ、音は練に別れを告げ、朝陽からのプロポーズを受けただろう。そうすると決めていたのだから。ひとまず、偶然がそうした流れを変えた結果、音と朝陽は別れる。だからといって、すぐさま音と練が結ばれるというわけにはいかない。優しすぎる音が朝陽のことを思いやる以上、練もそのことを気にしないわけもない（これは第一部で、音と練とが、木穂子を思いやったことの変奏―反復である）。練が、音と朝陽の別れを知らないままに、少しく距離をおいている間に、音の身にはさらなる偶然がふりかかっていた。北海道の里親

(養父)の訃報が入るのだ。直接は描かれなければならないけれど、北海道で葬式などをすませた音は、東京に戻って職場を辞め、部屋を引き払い、体の悪い里親(養母)の面倒をみながら、北海道で暮らしていくことを選択するのだ。

こうして、またしても音と練とは結ばれることなく、今度は地理的にも引き裂かれてしまう。そんな音に練は電話をかけ、会いに行くという。芳しい返事のない音に、はじめて北海道で出会った翌日に行った、思い出のあのファミレスで待っていると伝える。こうして『ドラマの嘘』は、ついに登場人物レベルにまで入りこみ、練自らが出会いの反復を演じていくとする。それでも、北海道での約束は、偶然やファンタジーをのりこえて、きわめて現実的に必死になった練が、トラックで北海道まで向かうことで可能となる、リアルな出来事なのだ。

4

『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう』最終回後半は、第1話同様、二人が出会った北海道が舞台となる。音と練の関係の、そしてこのドラマの基(起)点に、円環構造よろしく回帰する。文字通り、振り出しに戻ったかのような北海道で、音は東京でのすべてをリセットしようとしていく。

東京から引きあげる前、荷物を搬出し終えた何もない部屋で、音は死んだ母に手紙を書き、練とのこの「恋」をしまっておくようにお願いする。そして、トラックに乗りこんで上京した時に練からもらい、これまで大切に部屋に飾ってきた桃の缶詰を、儀式のようにして食べる。それはつまり、練と離れて北海道で暮らすという、音の固い決意を示すものに他ならない。そんな音に、電話で一方向的に待ちあわせを告げて北海道に向かった練だけ

れど、二人が出会った時に訪れたあのファミレスに、音はやってくる。ここから、坂元裕二脚本による『ドラマの嘘』は、虚実を反転させるかのように、ごく現実的なファミレスでの会話を、テレビドラマとしては異例の五分という長さで展開していく。こうしてリアルとファンタジーが混交・攪乱された舞台が設定される。

しきりに東京の思い出話をする練に対して、「東京でいいこといっつもなかったです」と冷たい態度を崩さない音——この構図は、第6話で音が練を探しあてて訪ねた場面の関係を変奏・反復したものである。それでも、すでに多くの記憶——景——死者を共有しているこの二人ならば、ねばり強く話しかけつづけさえすれば、いつかはとけていく。帰ろうとする音に、練は食事をしないかと誘うものの、反応ははかばかしくない。それでも練は、あの時と同じハンバーグをわけあって食べようとして、注文する。その間違いを、独り言のように正そうとするのが、ここでの音のはじめての積極的な発話である。結局練は間違っ注文してしまうのだけれど、その間に音が語りはじめていく。里親は東京で暮らすことを勧めてくれたものの現実的ではないこと、さらには自ら身を引いてくれた朝陽には配慮を示したいということ、ここに音の性格をかけあわせれば、結論は一つである。

音「東京には帰らへん」

練「はい」

音「ここで暮らす」

練「はい」

音「引越し屋さん」

練「はい」

音「好きやで」

練「……」

音「好きなんやわ」

練「……」

音「それはほんまに……」

必死に涙を堪える音。

音「（頑張つて微笑んで）サスケの写真、送って？ 飾っとく。毎日サスケの写真見ながら寝るわ」

練もまた涙を堪えていて。

練「……（頷く）」

音「それで、たまに引つ越し屋さんのことも思い出すわ」

練「（頷く）」（第10話、64ファミレス・店内、214～215頁）

ここでも音は、自分の「恋」を最優先にはできずにいるけれど、それこそが音らしさでもあり、練もそのことは熟知している（そんな練に対してだから、音はこのように、振る舞っている）。それでも、二人の出会いの象徴ともいえるサスケの写真をほしがり、練を思い出すという音。練が写真を送るといえば、音は「ありがとう。これで安心して、振り出しに戻れるわ（と、微笑う）」と安堵する。このタイミングで、注文した料理が運ばれて

くる。ウェイトレスがもってきたのは、注文とは少し異なる、しかしあの時と同じ大根おろしのハンバーグとトマトソースのハンバーグだったという偶然。「運がいいですね」という練に、「(苦笑し) そんなちよつとの運ある?」と音が応じて、あの日と現在が折り重ねられていく。もとより、その間には二人で積み重ねてきた時間がある。ハンバーグをとりわけながら、練は「振り出しじゃないですよ」と、音に語りかけていく。

練 「杉原さん、振り出しじゃないです。前にここで会った時の杉原さんと、今の杉原さんは全然違います」

音 「……」

練 「苦しいこともあったけど、違います。変わってないように見えるかもしれないけど、違います。人ががんばったのって、がんばって生きたのって、目に見えないかもしれないけど、心に、残ってるんだと思います。杉原さんの心にも、出会った人たちの心にも、僕の心にも」

音 「……(頷く)」(第10話、64ファミレス・店内、216頁)

はじめて会った時から、お互いの「つつかえ棒」を見出しあった二人は、その後、切実でかけがえのない「恋」を秘めながら、お互いの大切な死者ごとあわせて相手を理解しようとし、いくつかの「景」を共有し、路地に咲くささやかな花を愛であつてもきた。自身のスタンスを崩さずに、自分のことよりも以上に人を思いやる中で、見えないもの、見えにくいものにまなざしを注いできた二人は、現実には非現実的なものをごく自然に見出せるのだし、逆に、夢のような出来事にも現実の重みを感じられるのだ。

そうである以上、練に音の変化が見えるのは当然で、音もそのことは知っているはずである。何しろ、東京を発つ前に書いた母への手紙に、音は次のように書きつけていたのだから。

音の声「この街にはたくさんの人たちが住んでるよ。時々思うの。世の中って綺麗なもののかな、怖いも

のなのかな。混ざってるのかなって思った。だから綺麗なものは探さないと見つからない。そんなことを教えてくれた人がいた。ひとりで見える景色と二人で見える景色は全然違ってたよ」

（第10話、53オフィスピルの搬入口、203頁）

「教えてくれた人」とはもちろん練であり、二人はそうにして、景を共有し、見てきたのだ。そうであれば、遠回りした時間、地理的な遠さ、辛い思いをさせてしまった人々……。これまで抱えこんできた現実の重みを、今なお、今後も担うことで、非現実的なまでの他人への優しさもつ二人が、お互いの「恋」のために生きることが可能な隘路が、ここにきてようやくのことひらかれるだろう。

練「北海道遠くないです。何回でも来ます。道、ありますから。そこ走ってきます。電車でも、車でも」

音「（頷く）」

練「会津に行く約束だって、まだ果たしてないです。猪苗代湖見せたいし、じいちゃんの種の大根だって食べて貰いたいです」

音「(頷く)」(第10話、ファミレス・店内、216～217頁)

かつて練は、音を会津に誘おうとしながら木穂子の存在ゆえにそうできず、音もまたそのことに気づき、「恋」(片思い)の終わりを確認したこともあった。いくら遅々とみえたとしても、それが二人のベースなのだ。

練「道があつて、約束があつて、ちよつとの運があつたら、また会えます」

音「(思いを込めて、強く頷き)会える」

練「僕も杉原さんのことが好きです」

音「はい」

練「はい」(第10話、64ファミレス・店内、217頁)

ラストシーンで「遠回り」を選ぶ二人らしく、長い道のりではあつたけれど、こうして二人はお互いの「恋」を語りあうことのできる地点にまでたどりつく。そして、こうした旅路自体が、『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう』というテレビドラマの軌跡―内実なのだ。もとよりそれは、ごく現実的リアルでありながら、眩しいまでのファンタジーでもある。ただしそれは、『いつかこの恋を思い出してきつと泣いてしまう』がその最初／最後に映し出した、路地に咲くささやかな草花を、かけがえのないものとして慈しむまなざし―優しさをもつ者にだけ見える「景」なのである。

※シナリオの引用は、坂元裕二『いつかの恋を思い出してきつと泣いてしまふ1・2』（河出書房新社、二〇一六）により、適宜、DVD『いつかの恋を思い出してきつと泣いてしまふ』（ポニーキャニオン、二〇一六）を参照した。本稿は、立教大学日本学研究所第五六回研究例会「〈3・11〉後の表現を考える——演劇・サブカルチャー・文学・ドラマ——」（二〇一六・九・一七／於・立教大学）における報告「坂元裕二ドラマにおける〈3・11〉——『最高の離婚』・『いつかの恋を思い出してきつと泣いてしまふ』を中心に——」の一部に、新たな視点をくわえて再構成したものである。

参考文献

- 成馬零一「テレビドラマでしかできないこと——坂元裕二『いつ恋』をめぐる」〔月刊民放〕二〇一六・五）
- 成馬零一「成馬零一の直球ドラマ評論『5つ恋』 第一話〜最終話」〔サイト「RealSound映画部」〕[http://realsound.jp/movie/2016/03/post-1301.html](http://realsound.jp/movie/2016/01/post-835.html)〕 最終閲覧日二〇一六・九・一五）
- 拙論「坂元裕二のテレビドラマにみる〈3・11〉——『最高の離婚』の時間軸」（後藤隆基編『〈3・11〉後の表現を考える』立教大学日本学研究所、二〇一七）